

# 見出し語の定義, 内と外

島岡 丘 須釜 幸男

英語の習得は、英英辞典または英英和辞典の見地から捉えると、「未知語を既知の仲間に入れる」ということになろう。言葉は主として、対話と説明から成っている。未習語を、その言語の既習語から懸け離れて、いきなり日本語の対応語に結び付けることは、言語習得の原則に反するのではなからうか。

従来、日本の英語学習者は英和辞典を使ってきたため、英語の学習はテキストにある文脈依存が当然のこととして、語彙項目の独自の意味を蔑ろにしてきたようである。それに対し筆者は、学習者が未習語の定義に注目するよう、英英和辞典を作成し、定義に注目するようにしたが(島岡ほか編『ワードパワー—英英和辞典』(2002)), 更に本稿では、定義部分の存在する背景にある理論とその意義について明らかにしたい。

多くの英語辞典の見出し語とその日本語対応語とは何ら必然性がないため、時間と共に忘れ去られる傾向があり、各見出し語が使われている文脈に多く接することなしに、目標言語の習得は不可能に近い。ところが、入門期に与えられる文脈は極めて限られているため、やはり英英[和]辞典を見て、未習語がどのように説明されているかを学習課題にすることが、英語習得の早道ではないかと考える。

とはいえ、入門期にいきなり「英英または英英和を使え」と言うことは、暴論に響くかもしれない。ただし定義、即ち説明に使われている上位語が予め教えられているならば、英英辞典を使うことは不可能ではない。本稿では、未習語の定義になくしてはならない語句を、「不可欠語句(indispensable word & phrase[IWP])」と呼び、それらを中心に検討する。その理由は、不可欠語を入門初期に徹底して覚えさせると、英語での英語の授業がより効果を上げると当然、予測されるからである。予てから、必修語のリスト作成は頻繁に行なわれてきたが、頻度の高いものや作成者の内省による判断などを基準に作成され、本稿にあるような学習辞典の定義から不可欠語を調査するという方法は見当たらなかった。IWPが解明され、実行されることにより、今までとは異なる英語学習形態が生まれることであろう。

## 1. 不可欠語(IWP)

IWPは、見出し語を英語で説明する時に、不可欠である語を指す。主として、CIDE(1995)、WPD(2002)などの調査では、次のような不可欠語があることが明らかになった。

### (1) 品詞別の不可欠語

名詞：of句が上位語を占める。即ち、a kind of..., a part of..., a piece of..., a set of..., a group of... である。以下、“...”に当たる語もIWPとする。

動詞：動詞の説明はto...の形をとる。即ち、X + means to...の略式表現である[Xは未習語]。

形容詞・副詞：that関係詞節, -ing, of + 名詞句, like...の形をとる。

### (2) 未習語と既習語

a) 未習語=不可欠語 + 既習語 : 例. advice = an opinion of what you should do

b) 未習語=X + 既習語 + Y : 例. affection = a feeling of

liking

c) 未習語=between 既習語 and 既習語 : 例. fall = between summer and winter

d) 未習語=not + 既習語 : 例. uncertain = not knowing what to do

e) 未習語=ほぼ同じ意味の既習語 : 例. wail = a long, high cry

### (3) 主として名詞の定義における不可欠語

実際、名詞には、様々な性質とそれに伴う説明が行なわれているが、ある共通した説明法が認められる。それは最上位語句で始まり、右に枝分かれするという点で、日本語とはちょうど逆の関係になるということである。

最上位語はof句で、a kind of..., a part of..., a set of..., a piece of..., a group of... である。第二次上位語は、次の太字で示した語である。これらのIWPを定義に用いた語も例示した。

**action, activity** : business, process, game, play, politics, ...

**amount** : limit, load, lot, mass, litter, wealth, . . .  
**animal** : cattle, deer, fish, horse, mammal, snake, . . .  
**color** : black, brown, red, white, . . .  
**container** : bag, bottle, bowl, drawer, envelope, lid, . . .  
**device (tool, equipment)** : brush, camera, clock, compass, cylinder, hook, knife, machine, radio, toilet, whip, . . .  
**direction** : east, left, north, right, south, . . .  
**furniture** : chair, table, . . .  
**group of, a** : race, society, village, . . .  
**liquid** : alcohol, blood, ink, juice, milk, soup, urine, vinegar, water . . .  
**meal** : breakfast, lunch, supper, dinner, . . .  
**object** : ball, bell, charm, door, kite, magnet, moon, seed, toy, weapon, wheel, . . .  
**part of, a** : chest, season, shoe, shoulder, trunk, . . .  
**piece of, a** : coin, island, lump, road, skirt, stamp, . . .  
**place** : city, college, heaven, hell, hospital, market, where, . . .  
**person** : adult, authority, companion, critic, guest, judge, lawyer, servant, student, . . .  
**period** : afternoon, hour, year, week, . . .  
**plant** : crop, rice, vegetable, . . .  
**position** : up, upper, . . .  
**quality** : beauty, flavor, truth, . . .  
**set of, a** : alphabet, keyboard, shelf, uniform, . . .  
**something** : mystery, threat, . . .  
**space** : cage, room, sky, . . .  
**state** : announce, blame, condition, convenient, . . .  
**structure** : arch, body, bridge, building, carbon, fence, fiber, hair, wall, . . .  
**study of, a** : chemistry, ecology, history, . . .  
**substance** : carbon, chemical, coal, element, fuel, glue, liquid, material, plastic, rubber, tobacco, wax, wood, . . .  
**time** : morning, recent, since, . . .  
**unit** : atom, cell, kilometer, centimeter, litter, mile, word, . . .  
**vehicle** : aircraft, bicycle, bus, car, carriage, journey, motorcycle, motorcycle, ship, train, truck, . . .  
**way** : behavior, mind, . . .  
**what** : accident, example, hobby, item, result, reward, . . .

#### (4) 動詞と形容詞・副詞の不可欠語

本項では名詞を中心とした論考が目的であることから、動詞・副詞の不可欠語は省略する。即ち、名詞の数が最も多く、伝達上最も重要なためである。

#### (5) IWPの条件

英語教育においてIWPを活用する長所は、学習者の思考力を向上させながら、未習語の習得が可能になるということ、即ち単なる暗記に終らない、学習者の自発性を促し得る、発展性に富んだ学習が可能となる点にある。

こうしたIWPを突き詰めていくプロセスと、それを基に発展させ、未習語に当たるアプローチは、一種の哲学的性格を帯びていることに気付かされる。例えば、ドイツ観念論哲学の代表者ヘーゲル(G. W. F. Hegel)は、哲学体系(エンチクロペディー)を説くにあたって以下のように述べている。

哲学は、他の諸科学のように、その対象を直接表象によって承認されたものとして前提とし、また認識を始め、認識を進めていく方法を既に許容されたものとして前提とするという便宜を持っていない。

更にヘーゲルは、哲学体系(論理・自然・精神の三部門からなる)のうちの第一部『論理学』を説明するうえで、以下のような構成を打ち立てている。

#### 第一部 有論

- A. 質：有，定有，向自有
- B. 量：純良，定量，度
- C. 質量

#### 第二部 本質論

- A. 現存在の根拠としての本質：純粋な反省規定(同一性，区別，根拠)，現存在，物
- B. 現象：現象の世界，内容と形式，相関
- C. 現実性：実体性の相関，因果性の相関，交互作用

#### 第三部 観念論

- A. 主観的概念：概念そのもの，判断(質的判断，反省の判断，必然性の判断，概念の判断)，推理(質的推理，反省の推理，必然性の推理)
- B. 客観：機械的關係，科学的關係，目的的關係
- C. 理念：生命，認識(認識，意志)，絶対的理念

以上のように、IWPとの関連が深いことが窺われる。今後、より効果的なIWPを築くために参考になろう。

## 2. 英語で英語の授業をするために

新語の導入をする際に、日本語訳を与えるのではなく、新語句を既習語句に仲間入りをさせるように、授業を進め

ることが望まれる。Helloには「こんにちは」という日本語の対応語を与えるよりもむしろ、a kind of greeting wordsのように表現し、Greeting words mean(挨拶言葉)と付け加える。また、I, you, heなどを「私は」「あなたは」「彼は」のように説明するのではなく、“I” is the first person singular, and “you” is the second person singular or plural, and “he” is the third person singular and male. というように多くの不可欠語を使いながら、授業を進め、学習者の脳を活性化させることが必要である。

また、ここでIWPの重要性を認識し、効果を上げるために、論理実証主義で、言語分析の哲学者ウィットゲンシュタイン(L. Wittgenstein)の「言語ゲーム」を例に考えてみたい。その定義は、「言語と言語が織り込まれた諸活動の総体」で、「言語を話すということが、一つの活動ないし生活形式の一部であることをはっきりさせるため」の概念装置であるとされる。例えば、『哲学探究』にあるように、建築家が石材の名称を呼び、それに応じて助手が石材を運んでいくという「命令-服従」の言語ゲームを想定すると、一連の作業が進み、上手く建物が完成するためには、以下の項目が共有・機能される必要がある。

- ① コンテキスト(建設作業)
- ② 言語共同体(建築家と助手)
- ③ 語彙(「台石」「柱石」「石板」「梁石」)
- ④ 理解の規準(命令に従って要求された石材を運ぶ)
- ⑤ 語彙の使用(必要な石材に対応する言葉を叫ぶ)

以上を踏まえると、このIWPの目的が実を結ぶためには、以下の条件が必要となる。

#### (1) コンテキストの量

IWPが効果を上げ、相乗効果で未習語が血肉となるには、膨大なコンテキストに触れることが前提となる。「言語ゲーム」の例に従えば、建設作業(コンテキスト)が増えることによって、建築家と助手による一連のコミュニケーション密度が高まることになる。つまりは、助手は当初の建築作業では、どれも単なる石でしかなかった石(IWP)に対して、コンテキスト増加に伴い、末広がりにもその役割を理解し、指示がなくとも状況に応じて、適切な石材を用意できるまでに至る。したがって、英語教育においても、従来の

授業用テキストのコンテキストでは到底、対応できない分量であることは想像に難くない。しかも、それを一定のルール(以下の(2))に従って、英語と触れることが重要である。これにより、学習者の創造性と知識の集積度が高まるのである。こうした考えるという作業に基づいた授業は一方方向ではなく、双方向のスタイルに自ずとなり、好奇心と創造力に溢れた児童や生徒、学生達に効果的に受け入れられると思われる。

#### (2) 英語の論理的展開

前者の条件に補足的な意味合いではあるが、本質的な条件であると言える。本稿では、従来の「耳を慣らす」型学習法には、一定の疑議を唱えねばならない。つまり、従来の学習法では、未知の語や句と遭遇した場合、新たな日本語訳を付け加えるに留まっていた。これでは、暗記というルーティン作業の繰り返しであり、仮に訳語を覚えたとはいえ、その語自体が持つ真の意味を理解したことにはならない。また「言語ゲーム」の例に従えば、助手に必要なことは、石材の名称ではなく、各作業における各石材の役割を覚えることなのである。つまりは暗記力の差で、学力を判断されるということは、無用な落ちこぼれを生み出すことに他ならない。

当然のことながら、社会の要請は暗記力よりも、創造性に満ちた人材であり、そうした逸材を輩出することが教育の原点である。一定のルール、即ち英語の論理的展開を習得させ、あとは学習者の創造性に訴えるような教育が重要である。

#### 参考文献

- Baker, G. P. and Hacker, P. M.S.(1980). *Wittgenstein: Understanding and Meaning*. Oxford.
- Hegel, G. W. F.(1949-58). *Samtliche Werke. Bd. 8. Jublaumsausgabe in 20 Banden.* (Hrsg.) von Hermann Glockner. Frommann.
- Porter, P.(1995). *Cambridge International Dictionary of English*. CUP.
- Shimaoka, T.(2000). "Disambiguating Dictionary Meaning: 'Guide-words' in *CDAE*(2000) and their Pedagogical Implications." SYMPOSIUM. No. 5. 茨城キリスト教大学言語文化研究所.
- Wittgenstein, L.(1953). *Philosophische Untersuchungen*. Oxford.
- 大森荘蔵ほか編集(1985).『新・岩波講座哲学2 経験 言語認識』岩波書店.
- 島岡丘・須釜幸男(2004).「英語の語彙——その辞書的定義と社会的背景」.『聖徳大学研究紀要 人文学部』第15号.